

落されて、敵の大勢の中に馳入られしかば、追破られき。今此難所をみるに、更に人馬の通ふべき道ならず、一谷よりさかしき岩崎を五町計り落されき。二條殿より給られける。松風と云名馬の荒馬に乗給ひけり。馬の尻足のはひすねの皮みな破れけるとかや。

〔北條五代記〕^五清水太郎左衛門大力の事

太郎左衛門[○]中 扱又奥州より出たる岩手鶴毛と號す駿馬を持たり。尾かみあくまでちみ、九寸あまりにて強馬なり。長久保より、鷲巢の嶺へは、上道五里程あり。此馬を心見んため、甲冑を帶し、旗をさし、卯の刻に長久保を乗出し、鷲巢を目がけ、むち打て、野原を眞直に馳行有様。たゞ逸物の鷹八重羽の雉を見て、升かきの羽を飛がごとし、鷲巢の嶺へのり上、いきもつかせず引返し、良刻長久保へ歸馬するに、あせをくださる名馬也。

〔常山紀談〕^四山内土佐守一豊、其はじめ織田家に仕へたりけり。東國第一の駿馬なりとて、安土に牽來てあきなふ者あり。織田家の士、是を見るに、誠に無雙の駿足なれど、價あまりに貴しとて、求むべき人なく、いたづらに牽きて歸らんとす。一豊、其比は猪右衛門といひしが、此馬望に堪かねたれども、いかにも叶ふべからざれば、家に歸り、身貧きほど口惜き事はなし。一豊、奉公の初に、あつはれかゝる馬に乗りて、屋形の前に打出べき物をと、ひとり言しければ、妻つくくと聞て、其價はいかばかりにてか候と問ふ。黄金十兩とこそいひつれと答ふ。妻聞きて、さほどに思ひ給はんには、其馬求め給へ、其の料をばまゐらすべしとて、鏡の奩の底よりとり出して、一豊が前にさし置きたり。一豊大におどろき、此年ごろ身貧しくて、苦しき事のみ多かりしに、此金ありとも、えらせ給はず、心強くも包み給ひけん。今此馬得べしとは思ひもよらざりきと、且は悦び、且は恨む。妻仰の旨ことはりにてこそ候へ、さりながら、これはわらは此御家に參りし時、父此のかゝみの下に入れ給ひて、あなかしこ、世の常の事にゆめく用ふべからず、汝が夫の一大事とあらん時